

2023年1月17日

シニアネット共同代表 北岡孝義

2023年を迎えてのメッセージ

シニアネットの皆さま、明けましておめでとうございます。健やかな新年をお迎えいただいたでしょうか。

世界はいま戦争、食糧危機、大規模災害の多発など、人間の生存危機ともいえるべき事態に取り囲まれています。しかし、国連は核大国の対立による機能不全に陥っており、大国の指導者たちも国家の安全保障に右往左往するばかりで、「人間の安全保障」という哲学は忘れてしまっているようです。

そんな中で、私たちは2023年を迎えました。2023年はとんでもない年だった、と後々私たちの孫たちから糾弾されるのではないかと、そんな思いに駆られています。

1月5日の毎日新聞夕刊は、「唐突な政策転換、岸田首相に抱く違和感の正体」という特集を組み、「何だろう、このモヤモヤ感は」と報じました。共鳴できる特集でした。しかし、私は“モヤモヤ感”を乗り越えて「岸田は危ない！」という危機感の方が強くなりました。いま、岸田首相は、とんでもないことをやろうとしています。亡くなった安倍元首相がやろうとしてやり切れなかったことを、岸田は“俺がやってやる”といわんばかりにやろうとしているようです。専門家の間では、その実行力に疑問符がついているようですが・・・。

攻撃型兵器の導入、防衛費の倍増、原発回帰（再稼働の全面展開、建て替え、新增設）、南西諸島のミサイル基地化、辺野古新基地建設。いずれも戦後国策の大転換つながります。「憲法9条を擁護し、二度と戦争はしない」と誓った戦後77年間の日本の生存原理を「戦争のできる国、戦争する国」に変えようとするものであり、安倍がやり残した課題です。安倍に総理大臣にしてもらった、という背景があるのでしょうか。自民党内リベラルの伝統を継ぐといわれてきた岸田の政治姿勢にリベラル派らしい政治信念のカケラも感じられません。毎日新聞夕刊特集には、岸田の政治を「安倍一強政治を踏襲しているだけ」とありました。そのとおりだと思います。

ひるがえって、わが国の政界を見れば、自公政権に対する野党の対抗力は“決定的に弱く”岸田政策への歯止めを期待することはできないでしょう。こんなことを思いながら、私は政・官・軍のトップリーダーたちがお互いもたれあいながら、責任を押しつけあい、あの無謀な対中・対アジア・対米戦争に突入していった1980年代の“暗い時代の歴史”を思い出していました。今日もまた、再び戦争にまきこまれることは絶対にあってはならない、と祈るばかりです。

今年もご家族ともども健やかにお過ごし下さるようお祈りしております。

以上